

[論文]

再臨運動期における内村鑑三と祐之

黒川知文

〈目次〉はじめに

1. 再臨運動の開始・高揚期の概況
2. 再臨運動以前における鑑三と祐之
3. 再臨運動期における内村父子

おわりに

はじめに

1918年1月6日午後2時、内村鑑三、中田重治、木村清松が発起人となって、東京基督教青年会館において聖書の預言的研究演説会が開催された。当初から1000人を超える聴衆があり、3月からは大阪、京都、神戸、横浜においても預言的研究演説会が開催され、横浜において5月24日に、第1次聖書の預言的研究演説会の終了式が開催された。

1900年に創刊された『聖書之研究』には、内村の再臨運動における講演が記録されている。だが、個人的な事柄、とりわけ家族に関するような私的な状況については、『聖書之研究』には述べずに、米国の友人D.C.ベルへの手紙⁽¹⁾に記している。息子祐之に対する思いも、ベルへの手紙に述べられている⁽²⁾。

再臨運動期において、内村と祐之との父子関係はどのようなものであったのか。

再臨運動の開始・高揚期の概況を見た後に、ベル宛て内村の手紙と祐之の回顧録を史料として使用して再臨運動期における二人の関係を考察する。

1. 再臨運動の開始・高揚期の概況

中田重治(1870-1939年)の東洋宣教会は柏木にあり、内村鑑三宅に隣接していた。1916年7月17日未明に起きた柏木一体の火事の時、中田重治は聖書学院学生を引き連れて消火に努め、内村家への類焼を防いだ。これをきっかけに両者の交際が始まった⁽³⁾。

木村清松(1874~1958年)は、1894年以降の渡米時にムーディ聖書学院でも学び、1902年に帰国後、全国にわたって伝道を展開した。1908年から6年間⁽⁴⁾は日本組合教会洛陽教会牧師を勤めた。

中田と木村は米国ムーディ聖書学院に留学して再臨論を学んでいた。この

二人に、内村が加わって再臨運動が開始された。内村が56歳で最年長であり、この運動の中心的役割を果たした。

内村が再臨運動に参加した遠因としては、キリスト教国である米国が第一次世界大戦へ参戦したことに対する失望、愛娘ルツ子の死、思想的行き詰まりの時に米国の友人ベルから送られてきた雑誌『Sunday School Times』の再臨に関する記事を読んだこと等が指摘されている。⁽⁵⁾

確かにこれらのことは内村自身も述べていて、十分可能性があるが、聖書研究によって再臨の教義の重要性を知るに至ったことがより直接的な要因であったと考えられる。

1918年1月10日発行の『聖書之研究』の「新年雑記」において「問題はキリスト再臨を中心的真理として見たる聖書の研究である」⁽⁶⁾と述べ、その後の内村の演説内容は聖書研究に依拠するものであった。また、「余がキリストの再臨に就て信ぜざる事共」においては、再臨の年月日を計算すること、神癒、そして聖霊の臨在としてのキリストの再臨を信じないと述べている。⁽⁷⁾

他の二人とは異なり、あくまでも聖書研究に基づく独自の再臨論を内村は展開したことがわかる。

1918年1月6日午後2時、3人が発起人となって、東京基督教青年会館において聖書の預言的研究演説会が開催された。講演題と講演者は以下の通り



図1 東京基督教青年会館 右奥の建物が講演会場

である。

1月6日	『聖書の根本的真理』	中田重治
	「我が父の家には御宅多し」	木村清松
	「聖書の預言的研究」	内村鑑三
2月10日	「馬太伝に現れたるキリストの再来」	内村鑑三
	「基督の再臨につける使徒等の観念」	オルトマンズ
	「偽基督の霊と彼の出現」	中田重治
3月3日	「人の子及び主としての基督」	藤井武
	「世界の平和は如何にして来る乎」	内村鑑三

内村は必ず講演し、しかも多くの場合、最後に講演した。

1月6日も2月10日も1200人を越える参加者があり、3月3日の演説会には1300人を越える参加があった。⁽⁸⁾

再臨運動は開始時において、すでに高揚した運動として展開した。これは1914年から1917年にわたる超教派の総動員伝道である全国協同伝道とともに、東洋宣教会による再臨運動が、その先駆の働きをしていた結果だと考えられる。

中田は再臨運動を東洋宣教会の中心的な運動とみなして信者に参加を呼びかけた。そして自らには聖書研究に弱点があることを認め、それを補完するものとしての内村の再臨運動への参加を歓迎した。それは、2年にわたる再臨運動の間、『聖潔之友』に再臨講演会の広告だけでなく、内村の講演内容をも掲載していたことから明らかである。⁽⁹⁾

2月20日には今井館聖書講堂において、再臨待望信者の合同祈祷会が開催された。30人以上の参加がありその所属教会は、今井館、東洋宣教会だけでなく、日本伝道隊、聖公会、メソジスト教会、福音教会、基督教会、日本組合基督教会（大阪天満教会）もあり、再臨運動が超教派の運動として展開したことが分かる。



図2 天満教会の伝道集会の様子 参加者は起立して聴講した



京都基督教青年同盟会館



横浜基督教青年同盟会館



神戸基督教青年同盟会館

図3 演説会の会場

再臨運動は、地方都市へも展開した。

聖書の預言的研究演説会は、以下のように三月以降には関西と関東の主要都市である大阪、京都、神戸、横浜においても開催された。

3月10日 大阪天満教会	参加者600人以上
「信仰の三階段」	内村鑑三
「余が基督の再臨を信ずるに至りし理由」	木村清松
「聖書の中心的真理」	中田重治
「基督再臨の欲求」	内村鑑三
3月13日 京都基督教青年会館参加者1200人以上	
「聖書の中心的真理」	中田重治
「余が基督の再臨を信ずるに至りし理由」	木村清松
「世界の最大問題」	内村鑑三
3月31日 神戸基督教青年会館参加者1200人以上	
「基督の復活と再臨」	内村鑑三
5月26日 横浜基督教青年会館参加者会堂一杯	
「米国に於る基督再臨の信仰」	平出慶一
「日出国より登る天使」	中田重治
「世界戦争と基督教」	内村鑑三

これらの講演会においても、内村は最後の講演を担当して指導的立場にあったことが分かる。また、講演者には、内村と中田と木村以外に、組合教会、自由メソジスト教会、聖公会、日本伝道隊等所属の牧師や信者がいて、東京における演説会と同じく、超教派の協力活動であったことも分かる。

特に神戸における演説会には、1200人が参加し100人以上の人が座れずに散会したほどの盛況ぶりであった。5月26日に神戸で開催された第二回演説会には900人以上の参加があった。

4月から5月にかけて、再び東京三崎会館（旧バプテスト中央会館）にお

いて7回にわたり聖書の預言的研究演説会が開催されたが、参加者は平均して600人から700人であった。これは1月から3月にかけて開催された演説会参加人数の約半分であり、急激な減少といえる。再臨批判論文が発表されたことがその背景にあると考えられる。

5月24日に、第一次聖書の預言的研究演説会の終了式が開催された。⁽¹⁰⁾

2. 再臨運動以前における鑑三と祐之

内村祐之は1897年11月12日に渋谷において鑑三の長男として生まれた。鑑三が37歳、母しづが23歳で、3歳年上の姉ルツ子がいた。鑑三は、この年の1月には黒岩涙香(1862-1920年)に招かれて『万朝報』英文欄主筆に就職し、内村家は名古屋から上京し淀橋町角筈に移住した。7月15日には便利堂書店から『夏期演説後世への最大遺物』が刊行されている。

したがって鑑三にとって、不敬事件以来、定職なく絶えず移住した試練期から、大手新聞社に職を得、ジャーナリストの時代へと新たな安定した人生段階に入る時期に祐之が生まれたことになる。内村家にとって喜びであったと思われる。

「祐之」という名前は祖父の宣之が易经から選び、鑑三の「金次郎」、「隆盛」との候補名の三本のくじから三歳上の姉ルツ子が選んだ。⁽¹¹⁾

鑑三は、祐之が誕生して8日後、ベル宛ての手紙の冒頭に、以下のように記した。

あなたに知らせるべきだと思う。12日に息子が生まれた。強くて赤い皮膚の男の子で素晴らしい食欲で家中劈く泣き声!私の祈り



図4 1910年の内村家 左から祐之、鑑三、ルツ子、しづ

は、息子が彼の父親のようになること、犯した罪やいつも嘆く弱さにおいてではなく、罪や弱さにかかわらず絶え間なく上から受けている恵みにおいて、この子の名前は「天がこれを助ける」を意味する祐之にした。アブラハムとイサクの事例から推定されるように、東洋の家庭における息子の誕生は、大事件である。⁽¹²⁾

手紙には、祐之が生まれたのは神からの恵みであるとする鑑三の父としての喜びがあふれている。そして、自分のようにになると期待している。100歳のアブラハムによく与えられたその子イサクのように、息子祐之の誕生は内村家にとって待ちに待っていたことであつたことも推定される。1907年に内村家は角筈から柏木に引っ越し、鑑三は、一高、東大の学生伝道を開始し「柏会」「白雨会」が形成されていく。

1908年10月、小学年生であつた祐之は、父の門弟である早稲田大学学生に連れられて、戸塚球場における米国ワシントン大学チームと早稲田大学チームとの第四回戦を見に行つた。この時、鑑三は祐之のために「早華野球戦見せおきたく候間、十一時、ご放校下されたく候」という早退届を書いた。鑑三は、スポーツは「若い者のあり余る精力を適当な方面に発散させるのは教

育上必要であり・・・最も健康的でよろしい」と考⁽¹³⁾えていた。鑑三自身は、「生来不器用で、これと名のつくス⁽¹⁴⁾ポーツはやつたことがない」。



図5 独協時代の祐之

祐之は、1909年秋には米国ウィスコンシン大学チームと慶応大学チームの野球の試合を三田綱町グラウンドで見た。米国チームと日本の大学チームとの野球の試合を見たことは祐之の「野球熱を決定的にするような出来事であつた」このように小学時代に野球好き

になった祐之を、鑑三は黙認し、母は入場料を工面したので、両親はスポーツに理解があると祐之は考えていた。⁽¹⁵⁾ 1911年に、14歳の祐之は独逸学協会学校中学（独協）に入学した。これは祐之の意思ではなく、「カントやフィヒテやゲーテを生んだこのドイツ語を、若い時に覚えておかなければ機会を失う」「鶏口となるも牛後となるなかれ」との鑑三の教育方針に基づくものであった。⁽¹⁶⁾

独協は野球の名門校でもあったが、祐之が入学する2年前には野球部は廃止されていた。そこで祐之は淀クラブという草野球クラブに加入して、ニコライ堂修道僧チーム等を相手に野球の試合をした。やがて祐之は投手となって独協3年生の時には日比谷公園グラウンドで5年生を相手に勝利している。

1913年、米国大リーガーが来日してニューヨーク・ジャイアンツとシカゴ・ホワイトソックスの試合を見て祐之は感激した。その後、ボストン・レッドソックス外野手トリス・スピーカー（Tristram Edgar Speaker 1888-1958年）⁽¹⁷⁾が祐之の「一生涯のアイドル」になった。

祐之は、ドイツ語で受験できる第一高等学校の三部（医科志望科）を進学目標として勉強した。1916年9月には「受験準備をそれほどしたとは思わないが、入試結果は意外にも上位で」合格した。鑑三は祐之の高一入学を喜び、ベルへの手紙では「貴兄に送る最善の報は、祐之が、医学部へ連なる帝国大学に見事、入学したことである。神は我々すべてを祝してくださった。7年後には苦難にある人々を助ける若き医学博士になる……入学競争は実に厳しいが、彼は合格した。我々の友人たちはみな歓喜に湧いている」と述べ⁽¹⁸⁾

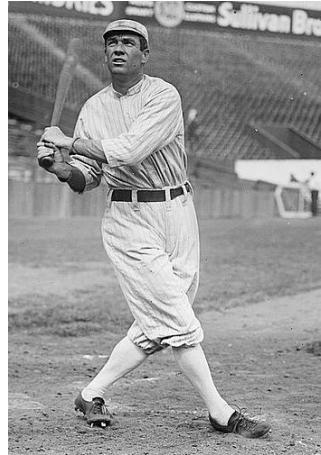


図6 トリス・スピーカー
1912年

ている。当然、「友人たち」だけでなく鑑三自身も歓喜していると考えられる。入学後、規則に従い寄宿生であったのにも関わらず、祐之が自宅通学になるように、鑑三は、一高の寄宿寮委員会から許可を取り付けた。息子を自宅におきたい鑑三の意思が表れている。

さらに、鑑三により祐之は「むりやり、野球部に入れられてしまった」⁽¹⁹⁾

祐之が野球部に入った経緯は以下になる。一高に入学してすぐに新入生と上級の寮生との野球の試合があった。草野球の経験がある祐之は、肩を痛めた投手の代わりに、臨時に投手となった。試合には負けたが、祐之は野球部に目をつけられた。祐之は、父の許しが無い入部できないと言って、入部の勧誘を拒否した。野球部部員の城戸四郎は、鑑三の著作に目を通してから、直接、鑑三に会って、祐之の野球部入部を談判した。この時、鑑三が出した入部条件は「禁酒とノーサンデーゲームの2つであった」⁽²⁰⁾。禁酒と安息日遵守はピューリタンの道徳であり、内村家の家訓でもあった。野球部は鑑三の条件を承諾して、祐之の野球部への入部が決定した。したがって確かに祐之の決定ではなくて、鑑三が決定したことであった。

同年9月23日のベル宛て手紙では、ベルから祐之に第一高等学校入学のお祝いが送られたことに対するお礼が、冒頭に以下のように記されている。

豊かなお祝い金に添えられた息子への親切な手紙に我々はみなとても喜んでます。息子は百万長者になったと感じています。彼の人生でこれまで受けた最大のお金でした。息子はあなたのお金で一本、計器、運動用具やそれ以外の多くの物を買うことを今考えています。あなたの優しい親切さに対する礼状を、ドイツ語で息子は書くつもりです。⁽²¹⁾

鑑三にとっては、祐之が一高に入学したことが大きな喜びであったことがわかる。

同年11月29日、鑑三は柏木からベル宛ての手紙で以下のように記した。

私はとても忙しく、クリスマスまでもそうなるだろう。だから、これがあなたへの私のクリスマスの挨拶です。祐之はドイツ語には気が進まないが、少なくともあなたに手紙を出そうと言ってます⁽²²⁾

「私はとても忙しく」とあるが、鑑三は、この年、『聖書之研究』読書会での講演（4月）、米国聖書会社創立百年記念会での講演（5月、聖書研究社より『旧約聖書伝道之書』を刊行（6月）、長野県南北佐久郡旧新信者懇親会での講演（7月）、栃木県『聖書之研究』読書会での講演（10月）、京都『聖書之研究』読書会での公演があり、確かに多忙の年であった。特に8月に、米国の友人D.C.ベルより雑誌The Sunday School Timesが送られてきて、鑑三はC.G.トランプルの再臨記事を読んでいる。この記事が、再臨運動開始の遠因の一つにあったと考えられる。また、「祐之はドイツ語には気が進まない」とあるが、父の意向によってドイツ語を学ぶことになったので当然のことであろう。だが、ドイツ語は祐之の第一高校受験の時にも役立ち、祐之が医学部で学ぶ時にも役立った。鑑三の判断が予期せぬよい結果をもたらしたと考えられる。

翌1917年2月7日に、鑑三がベルに宛てた手紙には、ニーチェを読んで「7世紀の無力なキリスト教を破壊するために神がモハメットを送られたように、まさにその目的で（教会キリスト教を弱小化するために）、神が彼を送られたと思う、」とニーチェが批判されている。そして「祐之は最終試験で80人クラスの二番になった。彼は春の東京の大学対抗野球試合において重要な役割を果たすことが期待されている。かわいそうに、彼は有名な(?)父親のために、新聞記者の注目の的になっている」と後半に書かれている。祐之の優れた成績と、春の大学対抗野球試合で祐之が活躍することへの期待が表れている。だが、鑑三が祐之の野球にいただいた多大な期待は裏切られることになる。

祐之の投手としての初陣は、鑑三の手紙に「春の東京の大学対抗野球試合」とあるように、1917年4月上旬の対三高戦であり、これは一高にとり最



図7 一高時代の祐之

高の年中行事であった。この試合において、祐之は肩を痛めた主将谷本投手の代わりに投手として重責を担った。だが、試合は10点以上も開く惨敗になった。祐之は「一高の30年の野球史上、ノックアウトされた最初の投手」であった。祐之は屈辱感のためにその日は自宅に帰らずに友人宅に泊まった。

翌日帰宅すると、祐之に対する鑑三の怒りはものすごく、大雷を落とした末に「勝負ごとにそんなにこだわるなら、野球なんか、やめてしまえ!」と言いつつ、この時、祐之は「このまま野球をやめるくらいなら一高をやめます」と言って立ち上がりざま、学帽から柏の校章をもぎとって、畳にたたきつけた。このすさまじい祐之のけんまくに、さすがの父もやや顔色をやわらげ、「まあ、そんなに興奮せんでもいいだろう」と言って、とにかくその場は収まった。だが、二人とも自分の言い分を引っ込めたわけではないから、しばらくは冷戦が続くことになった。

後日、父の弟子である一高生小出義彦の忠告があり「これからはあまり勝負に熱中するな」という鑑三の条件付きで折れて、「一世一代の親子喧嘩もここに幕を下ろしたのであった」⁽²⁴⁾。

3. 再臨運動期における内村父子

1918年1月6日午後2時に東京基督教青年会館において再臨運動が開始された。

同年1月30日にベル宛てに以下の内容の手紙を鑑三は送った。

「今年の最初の日曜日である1月6日に、キリスト再臨の説教者として初めてデビューしたのを聞いてあなたは喜ぶでしょう。1200人以上の人が聞き

に来て、忘れられない講演会になりました」と、東京基督教青年会館において開始された聖書の預言的研究演説会に多くの聴衆の参加があり鑑三も喜んだことがわかる

鑑三は、2月10日にも講演会、大阪、京都、その他にも講演する予定であることを述べている。さらに、「再臨の教理により聖書が私にとって新たな本になりました。札幌でキリストを私の救世主として受け入れて、今年ちょうど40年目になります」と、札幌農学校の時に回心して40年目になることを記し、ベルが送付した Dr. Frank M. Thomas, *The Coming Presence*; J. F. Silver, *The Lord's Return* が再臨の教理を知るために有益だったと述べている。

鑑三は、1916年4月6日に米国がドイツに宣戦布告して第一次世界大戦に米国が参加したことに絶望して「アメリカではなくて、イエスの到来が私の希望であり、今や私の希望は堅固な岩の上に成り立っていて、全世界がサタンの導きに従い、狂った戦争に陥り互いに殺しあったとしても、私は揺るぎません」と再臨信仰の観点から述べている。

このような再臨運動や世界状況に関する内容の後に、家族のこと、特に祐之の状況について鑑三は、「祐之は大学仲間の間では、禁酒と安息日遵守の説教者であり、彼と同じ生活をする改宗者を獲得しています⁽²⁵⁾」と述べている。

鑑三が提示した野球部入部の条件である禁酒と安息日遵守を、祐之が守り唱導し、その結果、野球部員にキリスト教への改宗者も生まれている。そのことに鑑三が満足していることがわかる。

2月16日のベル宛て手紙において、鑑三は、まず、再臨運動の進展を説明し、それがベルの30年の祈りの答えであると述べている。30年間、再臨を祈り続けたベルが文通によって鑑三に再臨についての情報を送り続けていたことがわかる。鑑三は、正統的教会と異端的教会から再臨運動が攻撃されている現状も記している。

そして最後に、唐突に「祐之は私がこれを書いている間に、大学寮から今

帰宅した。母親もとても嬉しく思っている⁽²⁶⁾」と述べている。祐之の大学寮からの帰宅は「母親も」とあるように鑑三にとっても嬉しいことであったと推定される。

4月6日、一高にとって最高の年中行事である一高三高戦が開始された。昨年は祐之が投手となったが惨敗に終わっている。鑑三は、この日、翌7日の日曜日に、午前は聖書研究会、午後2時から三崎町バプテスト会館で聖書の預言的研究会演説会があるためにか、鑑三は、知人に書簡を書くことだけをして、演説会の準備をしたと考えられる。

一高三高戦は、試合会場が京都の三高グラウンドであったために、平家の赤旗を立てた三高の応援団だけがグラウンドを埋め尽くすという異常な応援状況であった。一高にとっては悪状況の中、祐之の好投により一高が勝利した。この時、祐之は、三高の応援対策として捕手のミットだけに注意を集中して投げた。その結果三高に与えた得点は1点、三振9個、四球4個の成績で、一高が10対1の大差で三高に勝利したのである。

勝利した一高野球部部員は東京駅に凱旋した。この時、祐之は東京駅で予想外の場面に出会う。

こうしてこのたびは10対1の大差でめでたく勝ったこととて、もう身を隠す必要もなく、チームと共に胸を張って東京駅に着いたが、ここで私はまたもや驚かされた。前年、あの大雷を落とした鑑三が、母と共に出迎えの人波の中にいたのである。⁽²⁷⁾

鑑三は、再臨運動を開始したばかりの、多忙な時に、家族とともに東京駅まで祐之の一行を迎えに行ったのである。よほど嬉しかったのであろう。

内村は4月9日に、京都の佐伯理一郎に以下の内容のはがきを送っている。

拝啓、愚息祐之大勝につき御祝電被下誠に有難く奉存候、今日東京駅に凱旋仕

り当方一同の歡喜此上なく候、是は確かに小生等の目下従事しつつある靈的大戦闘の大勝利の予兆と存候、聖書の純福音が所謂哲学的自由神学を撃破するも此通りならんとの上よりの御示しと存じ候、一昨七日の集會も亦活力に充ちたる盛會に有之候、ミッセスの御全快を祈り候⁽²⁸⁾

「今日東京駅に凱旋仕り当方一同の歡喜此上なく」と大勝した喜びを客観的に述べているが、「当方」には鑑三もいたのである。「小生等の目下従事しつつある靈的大戦闘」とは再臨運動のことであり、「聖書の純福音が所謂哲学的自由神学を撃破するも此通りならんとの上よりの御示し」とは、再臨運動が批判者たちに勝利することが神の御旨だということである⁽²⁹⁾。

注目すべきは、野球で一高が三高に勝利したのは再臨運動の「大勝利の予兆」と鑑三が述べている点である。

野球の試合と再臨運動とは何の関係もない。だが鑑三は、すべては神の導き、神の祝福であると考えていたことがわかる。鑑三は祐之の投手としての活躍に励まされて再臨運動を展開していったと考えられる。

その後、東京の大学対抗野球試合では、5月4日に一高が早稲田を7対0で勝利し、5月11日に一高が学習院を4対2で勝利した。これらは祐之の投手としての活躍によるものである。

鑑三は、5月15日にベル宛てに手紙を送り、その内容は以下である。

第一に、「都市における私の日曜日の會は成功の連続であり、ある大きな教會では最大限に人で満ちていた。神戸、大阪、京都の隣接する3都市に福音が宣べ伝えられた」「次の12か月には東京と大阪、そしてその間において説教することになる」と、再臨運動の進展を述べている。

第二に、「言うにも奇妙なことに、聖公會



図8 祐之の投球フォーム

の神学者、メソジストと組合派の牧師がユニテリアンと結託して私と私の主の再臨思想に反対している。彼らがこの教理を攻撃している間は、聖書自体を余儀なく攻撃していることになる」と、再臨に反対する者が現れたことを述べている。これは海老名弾正を代表とする自由主義神学者による再臨運動批判論文のことを意味する。

以上が再臨運動の状況の説明であるが、その後、以下の内容が続く。

祐之が今や日本の最も優れた野球選手の一人であることに貴兄は興味があるだろう。彼が投手であるチームは、日本で最も強い3チームを立て続けに打ち負かした。彼は気質においても安息日遵守においても堅固であり、そのために同僚からの尊敬を呼び起こしている。彼は誠実で、外から見るとより深く信仰が心に根付いている。ルツの場合には、潜在意識において、キリスト教信仰が、適切な時が来ると実を結ぶのを待っていたのを見た。これは家庭におけるキリスト教の影響の結果に違いない。私の場合は違っていた。子供時代、クリスチャンホームではなかった。だから、私のキリスト教信仰は、まさに始めから実証的であった。しかし私の子供たちは、生まれながらキリスト教を受け入れていて、そのために非論証的だが、私より深くより浸透している。⁽³⁰⁾

鑑三は、ここに救いについて家族それぞれの経験を分析して、以下の3類型を設定している。

- 1 祐之は、「生まれながら救われている」型で非論証型
 - 2 ルツは、「適切な時に救われる」型で非論証型
 - 3 クリスチャンホーム育ちではない鑑三は「実証して救われる」論証型
- この時鑑三が、祐之を「生まれながらキリスト教を受け入れている」としたことは、過ちであった。なぜなら、後年、祐之自身は以下のように述べているからである。

私は森羅万象の偉大さと精巧さを見るたびに全能の存在、すなわち神の存在を信ぜざるを得ない……それゆえ私は自分が全く無宗教だとは絶対に思わない。し

かし自分が罪人のかしらであるといった深刻な罪障意識はどうしても持ち得ないし、またキリストが人の形をとった神の子であり、人類の罪はキリストが十字架上で流した血によってあがなわれるということがキリスト教信仰の中心だと言われると、どうも私はクリスチャンを自称できないのである。ただしキリスト教のもつ倫理性、また人類愛の精神といったものを高く評価するには常にやぶさかでない⁽³¹⁾。

祐之は神の存在を信じ、キリスト教の倫理性を高く評価するが、福音、すなわち、イエスの十字架と復活は信じていないことは明らかである。鑑三は息子の信仰に関しては、楽観的で実状を理解していなかったとすることができる。

1918年5月20日の『東京朝日新聞』では、「一高覇権を握る」「今春球界に全勝の栄冠」「慶應軍を零敗せしめて盛んなる祝賀会を開く」の見出しによる記事が特集され、さらにスポーツ欄では、「投手の独舞台」「一高の名投手◇—内村鑑三氏の令息」の見出しで、以下のように祐之について報じられている。

—野球も出来る学問も出来る

近頃一高野球軍が素晴らしい勝利を治め続けて…学生の血を沸かしているが其の勝因は……内村投手の手腕にあるといふ…内村とは彼の内村鑑三氏の一人息子、其の初め内村氏が一高入学後同校野球団は氏の入団を懇請したが父君鑑三氏は頑として許さない、で部員は父君を攻め落とすべく柏木の家に押しかけて行った。時何の敗けるものかと力んで待ち構へた鑑三氏は青年の意気と熱誠に動かされたが此処をと踏張って恐ろしく難題の条件を持ち出した、兎も角相談の上で一旦引き下がったので先づは撃退し得たわと喜んだ鑑三氏の許へ暫らくしてから条件全部を承認するとの返答だ、愈々入団となって鑑三氏は其の前に委員と令息と膝突合わせて前の条件に依る誓いをさした、其全部は記憶しないが其中に学業が之に因って少しでも出来なくなった場合は如何なる重要な位置にあっても速かに止めさせるといふのと絶対の禁酒といふのがあった、今日内村氏は前の条件の一をも破っていない、内村投手は医科二年の二番である、近頃は一高の野球団中重杯を恐れる選手らは内村氏を盾にして杯の攻めを防ぐ有様、終にチャンピオン迄禁酒した。



図9 1918年5月20日『東京朝日新聞』スポーツ欄

鑑三は、5月20日夜7時半から日本基督神戸教会で説教した。第一テサロニケ第1章から演題は「望とは基督再臨の望である」。来会者は400余名で「新築の会堂に電灯眩しいばかりに輝き渡り最も心地好き会合であった」と述べている。5月21日午後7時より、鑑三は、京都基督教青年会の講堂でマタイ13章の解釈をして来聴者は600余りであった。23日朝、柏木に帰り、「大分疲れた、然し感謝の疲れであった」と述べ、24日夜、第一次再臨講演会修了式が開催された。

6月に入ると、北海道の札幌独立教会で、鑑三は1か月間の講演を行った。この時、祐之も鑑三と一緒にあった。

6月26日にベル宛て手紙に、北海道への伝道旅行について以下のように述べている。

私は、今、祐之を連れて、私の古き大学町を訪問するために北に向かおうとしている。そこで主の再臨の説教をするつもりである……組合派教会と関連する他の牧師が私の教えに反対していると言われた。だが、神が私と、私の友人と、そし

て彼らの祈りとともにおられると信じている。祐之の名前は、最も優れた野球の投手として国民的名声を持っている。だが、彼は禁酒を守り、アルコールと日曜の娯楽から英雄的に離れている。平安がありますように⁽³²⁾。

鑑三の母校の札幌農学校は後に北海道帝国大学になり、1928年、ドイツ留学から帰った祐之が医学部教授として赴任することになる。ベルへの手紙では、鑑三は、祐之の野球における活躍を誉め、禁酒と安息日の遵守を喜んでいる。祐之の活躍が鑑三の講演活動の活力になっていることがわかる。

おわりに

再臨運動の開始・高揚期における鑑三と祐之の父子による交流から以下のことが結論として挙げられる。

第1に、鑑三は父として祐之を愛し禁酒と安息日厳守にもとづく信仰教育をした。野球をめぐる一時確執があったが、鑑三が妥協して解決した。

第2に、鑑三の再臨運動の開始期・高揚期において、祐之は鑑三から教育されたように禁酒と安息日厳守を実行して大学対抗試合の投手として著しい活躍をした。

第3に、鑑三は祐之の活躍に励まされて、再臨運動に力を入れた。その背景には、起きることは、すべて神の最善の導きであるとみなす鑑三の前向きな信仰があったと考えられる。

今後の研究課題としては、祐之がその後福音を受け入れることができなかった理由と、「生まれながら救われている」とする内村の救済論の考察、特に万民救済論との比較考察を提起する。

〔注〕

- (1) David. C. Bell 1841-1930年。内村は米国留学中の1885年にワシントンで開催された第12回全米慈善矯正会議に出席して「大和魂」について演説した。そ

- の時に、エルウィンからワシントンまで乗った鉄道馬車の中でベルと出会い、ホテルでも偶然に合い、親しくなった。ベルはミネアポリスの組合教会の会計を務める市立銀行の頭取であり熱心なクリスチャンであった。1921年9月、ベルは病気の長男チャールズを伴って来日して、内村と36年ぶりに再会した。高木謙次「内村静子－内助の生涯」『内村鑑三研究』第54号 教文館 2021年、129-130頁。
- (2) 内村がベルに宛てた手紙は40年間に185通あり、1930年に89歳でベルが死去した後に、手紙はすべて日本に寄せられた。同、129頁。
 - (3) 鈴木範久『内村鑑三日録10』教文館、1997年、9～10頁。
 - (4) 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、369頁。
 - (5) 小原信『内村鑑三の生涯』PHP文庫、1997年、414頁。
 - (6) 『聖書之研究』210号、『内村鑑三全集24』岩波書店、1982年、42頁。
 - (7) 同、47～49頁。
 - (8) 演説会への参加者の数等に関しては、『聖潔之友』、『聖書之研究』、内村の日記等から分析した。内村は1918年8月26日以降、日記を克明に記しており、特に集会の参加者数も記録している。以下を参照。『全集33日記1』岩波書店、1983年。
 - (9) 『聖潔之友』の以下の号に内村の講演内容等が紹介されている。590号；597号；601号；605号；608号；610号；619号。608号と610号には、内村の長男である内村祐之の一高野球部の投手としての活躍と安息日と禁酒を厳守することが内村との関係で説明されている。長男の野球での活躍は内村にとって大きな励みであった。
 - (10) 拙著『内村鑑三と再臨運動』新教出版社 2012年、108-113頁。
 - (11) 内村祐之『私の履歴書 文化人19』日本経済新聞社、1984年、78頁。
 - (12) 『内村鑑三全集36』岩波書店、1983年、465頁。
 - (13) 内村祐之、前掲書、80頁。
 - (14) 同。
 - (15) 同、82頁。
 - (16) 同、83-84頁。
 - (17) 同、85-86頁。
 - (18) 『内村鑑三全集38』岩波書店、206頁。
 - (19) 同。
 - (20) 学業成績が下がったらやめさせるという条件は「事実ではあるまい」同、89頁。
 - (21) 『内村鑑三全集38』岩波書店、1983年、213頁。

- (22) 同, 228頁.
- (23) 同, 241-242頁.
- (24) 内村祐之, 前掲書, 91頁.
- (25) 『内村鑑三全集38』, 291-292頁.
- (26) 同, 296頁.
- (27) 内村祐之, 前掲書, 95頁.
- (28) 『内村鑑三全集38』岩波書店, 303-304頁.
- (29) この当時, すでに相原一郎介, 杉浦貞二郎, 海老名弾正, さらにS.H ウェンライトによる再臨運動批判が以下のように雑誌に掲載されていた。「基督再臨説の論議」『福音新報』1489; 「基督再臨説の起源」『六合雑誌』447 相原一郎介; 「基督再臨説の根拠について」『神学之研究』9-4: 杉浦貞二郎; 「基督再来論」『新人』213: 海老名弾正; 「内村の平和論を評す」『新人』213; 「内村氏一派の再臨運動」『基督教世界』1802; 「基督再臨説の論議」『福音新報』118; 「基督の再臨」『神学評論』5-4 S.H ウェンライト)
- (30) 『内村鑑三全集38』, 308-309頁.
- (31) 内村祐之, 前掲書, 114-115頁.
- (32) 『内村鑑三全集38』, 313-314頁.